碩心

社団法人　日本詩吟学院岳風会　認可

神奈川　碩心会　発行

60年11月号（160号）

発行者　根岸岳萃

編集　中村愛岳

60年11月現在会員数

逗子地区	173名
葉山地区	296名
大船地区	55名
（合計）	（524名）

奥伝の審査を受けた私

逗子A子部　高橋　華風

水引の紅の色が美しく目に入るよい季節となりました。とにかく下手で、奥伝の審査をうけるのに全く困ってしまった私に、逗子Aの先生方が一生懸命で御指導下さったおかげでやっと受けることが出来ました。テープに入れて戴き、それを主人に聞いてもらって、何度も何度も練習をし、本当に涙ぐましい程の練習でやっとあれだけです。でも最初はどうなるかと思っておりましたのに、とにかく審査には合格し、ホッとしている現在です。でも詩吟というものは楽しいものです。どんなに下手でもやめたいと思うことは一度もなく、病気で合計一年は休んでしまいましたが、それ以外は欠席したことがありません。

私共三姉妹夫婦は、以前より仲よしでしたが、吟を通して共通の話題が多くなり、益々楽しい、嬉しい姉妹夫婦となっております。中の妹夫婦が一番の先輩です。さすが私共より上手です。同じ趣味を持つということは楽しいことです。

やっと審査のとおった奥伝です。今後も練習に励み上達したいものと思います。

◎　三井先生総伝に

十一月一日付を以て総伝（岳瓏）に昇格されました。おめでとうございます。

碩心会　常任理事会ひらかる

とき・60年10月27日(水)6時30分より

ところ・逗子桜山会館

（議題）

一、初吟会の開催について

日時　61年1月19日(日)

場所　京急ビーチセンター

会費　三千円

当番支部　山ノ根銀詠逗子B諏訪平松

招待者　松井常磐新田・安孫子・鹿島先生

二、地区温習会（葉山地区）の開催について

日時　60年11月23日(祭)9時30分より

場所　葉山小学校体育館

三、50周年大会（62年）開催に係る費用の積立方式の採用について

一般会員（含高令）　一人月額150円×17月（61/1～62/5）

年少者　一人月額50円×17月（〃）

徴収法　大会積立金として別途会計とし、各支部毎、毎月納入

（その他）

◇碩心会も皆伝者がふえるので親睦・研究等を目的に（皆伝会）なるものを設けたい。

60年全国吟道大会吟行記

白井　麗風

十月九日

新横浜駅七時三十分集合は予定どおり。本県勢二百名は、小学生の遠足のようにはぎやか。碩心・横朗・海星の一グループ三九名は、加藤岳相先生の例の声（透る美声のこと）で整列を完了する。新横浜駅から新幹線に乗り込むのは始めてなので便利になったと感心。やがて、ひかり331号の車窓からは、冠雪直前の富士山が、すばらしい雄大な姿で私達を迎えてくれた。

神戸ポートターミナルホールで昼食をとる。神戸港は、横浜とまた異った趣きあり、屋上から六甲山の全景を楽しむ。バスは神戸市内を抜け、六甲山の十国展望台へ。明治中頃に英人によって開発されたとか。ケーブル、植物園、ホテル山荘等洋風に整備され、眼下に、神戸市街、大阪湾、淡路島が一望できる。六甲さんの愛称がある。バスは、かぶと山を右にして一ノ谷古戦場へ。四時須磨寺着。宝物館で青葉の笛その他拝観。暗くなってから須磨温泉寿荘へ。

十月十日

バスは八時に出発し、神戸市内へ向う。湊川神社に到着。明治五年の創建とか。戦災で焼失し、現在のは再建された明るい感じの社殿である。新田副本部長指揮で「大楠公」を奉納する。終って鳥居右手、水戸光圀公の手になる「嗚呼忠臣楠子の墓」に参拝。生田の森に既に面影はない。

神戸文化ホール大会会場は、三千人収容の大会場で満席である。大会委員長はわが松井岳洋先生。相変らずお元気でごあいさつ。合吟の続くうち、われら二百名の「神州」の大合吟はまさに圧巻であった。印象に残るのは、コンクール28組で、優勝、準優勝がともに男性であったこと。審査講評では、各組ほとんど差なし、同点の場合は吟法が教本どおりを上位としたとのこと。

京阪神の奥座敷、日本最古の湯の町有馬温泉池之坊満月城に六時到着。盛りだくさんの余興披露があって皆々大ハッスル。

十月十一日

帰途のバスは京都市内に入り、北野天満宮到着。学問の神菅原道真公を祀る、ご存知天神さんである。本殿は壮麗雄大な権現造り、日光東照宮のお手本とか。そのほか中門、東門、廻廊、透塀、後門など国宝ぞろいである。勉強だけでなく、詩吟の入門第一声は「九月十日」で始まります。礼拝十一時から京都御所拝観。承明門で紫宸殿を拝しながらその説明を聞く。建礼門を右に見て小御所、御庭池を見学、常御殿前に出て、四十分の拝観コースを終了した。

十二時、大徳寺を参観、有名な枯山水の庭を眺めながら、テレビで周知の尾関宗園住職のくだけた法話？を拝聴大笑い続く。門前の沙羅双樹を賞した後、同寺内「泉仙」の名物、精進鉄鉢料理が昼食で、満腹す。

本日の最後の見学は、東映太秦映画村となる。むかしの江戸日本橋通り、関所や屋敷町、明治通り、吉原通りと、珍らしいセットのコースを一周。途中ロケスタ（ロケーションスタジオ）で「あばれん坊将軍」撮影を見る。目まぐるしかったが、ヤングに混ってほんとうに楽しい一時間であった。

帰路京都発一六・三四ひかり二〇六号車の二時間三十分は、夕食やおしゃべりで大賑いであった。

葉山町詩吟詩舞の会盛会

絶好の晴天に恵まれた文化の日、文化祭行事として詩吟詩舞の会が行われた。いつもながら役員の方達が早々とつめかけ結束して任務遂行、九時半開会時には九分通り席が埋まり盛会のうちに手ぎわよく進められた。参加者249名は町文化団体の中でもその結束ぶりは自慢できよう。

秋を訪ねて

鎌倉散策

行事におわれる十月であったが、十月二十三日絶好の晴天に碩心会吟友は資料を手に鎌倉駅西口出発。

昔懐かしいチンチン電車にゆられて長谷駅下車。駅近くのもと日蓮の弟子四條金吾の邸跡「収玄寺」に詣り、寺宝日蓮像、又金吾の墓と伝えられる五輪塔があり、庭に咲く秋草に秋を堪能。

ほんの少し行き、交差点を左に折れゝば正面大楠の茂みに総門の見える「長谷観音」。広い境内に入ると無数の水子地蔵に目をみはり胸痛む。石段をのぼれば木造日本最大といわれる仏像を祀る観音堂が海に向って建立されている。休憩所で団子を頬ばりながら、眼下に遠く逗子・葉山を望めば秋の陽に海面がキラキラ輝き、まさに海光山長谷寺の名にピッタリの風景。

そこから又五分もゆくと日朗上人が捕えられていたという土牢のある「光則寺」。海棠で知られるこの寺へ、花咲く頃にぜひ又訪ねたいと思った。

〃かまくらやみほとけなれど釈迦牟尼は美男におわす夏木立かな〃情熱の歌人与謝野晶子のあまりにも有名な歌で知られる長谷の大仏「高徳院」に足を入れると多勢の観光客に混ってなんと外人客の多いこと。木立の間からすき通るような青い空をバックに、端然と座すその姿…円満で美しい顔だちは周囲の自然と完全に溶け合う。昼食、撮影でひと息つき、長谷裏通りに入り、漁業の神といわれる「甘縄神社」に詣る。

午後の陽ざしの露地にも何とはなしに〃鎌倉〃を感じつゝ三々五々歩けば「長楽寺跡」へ。すぐ近くに来る十一月一日開館という「鎌倉文学館」の工事が急ピッチで進められていた。山を背に海を望む処、舗道、街灯などのつくりにも、情緒が感じられ、〃文士の街鎌倉〃にふさわしく、出来上ったらもう一度訪ねたいと思った。

江の電踏切りを渡り由比ヶ浜海に向うと道端の小高い処に二十基ほどの五輪塔が並ぶ「和田塚」がある。明治時代こゝを堀った際に多数の人骨や埴輪などが出たという。和田義盛が北條氏と戦って敗れた和田合戦の時のものと推定され和田塚と呼ばれるようになった。碑に詣り腰をおろし、プリントの〃和田塚〃のくだりを朗読、しばし思いを武士の世に馳せた。

駅寄りに歩をすゝめ、長谷通りの「六地蔵」へ。鎌倉時代の刑場跡といわれ、その供養のために建てられたという。〃夏草やつわものどもの夢のあと〃の句碑があり、戦いに荒れ果てた平泉と鎌倉の当時の姿が重なって目に浮んできた。「忙中閑あり」の楽しい一日でした。

愛岳

鎌倉探訪

白井 寿風

てのひらに 赤き実三つ四つ古都の秋
行く秋や 水子の地蔵山を染め
御露坐の 背(せな)の丸(まろ)みや秋高し

堀口 蔦栄

秋風に 水子地蔵の風車舞う
土籠に 何を語るや秋の蝶
秋晴れを 背負いて露坐の仏あり

〜〜〜〜 。〜〜〜〜

晩秋の山路をゆく

鎌倉散策のおさそい

と き・12月1日(日)
集 合・国電逗子駅10時
昼食持参・軽装で御参加下さい。

逗子駅(バス)＝長勝寺下車＝安国論寺＝妙法寺＝北條時政邸跡＝唐糸やぐら＝日月やぐら＝釈迦堂トンネル＝報国寺＝久木ハイランド(バス)＝逗子駅解散

(秋元・中村)

練吟メモ

○昨年十一月から、吟友有志による古都鎌倉探訪が数回行われている。この機会に、鎌倉に大変ゆかりのある、そして日本漢詩の歴史上に一時代を画した「五山時代」について、少し触れてみたい。

○こゝで言う五山時代とは、鎌倉・室町・桃山時代を含めてのおよそ四〇〇年間で、いわゆる詩壇が、鎌倉・京都の五山を中心とした禅宗僧徒によって占められた時代をいう。漢詩の歴史上の年代区分である。

○さて、京都五山は別として、鎌倉五山は建長寺・円覚寺・寿福寺・浄智寺・浄妙寺の五寺をいう。鎌倉・室町時代は政権が武門にあったので、武士達が合戦と醜い争い事に明け暮れている間に、五山の禅僧達は学問研究に力を注いだ。すでに遣唐使は廃止されていたが、優秀な僧達は大陸に渡り、また、大陸からは名ある帰化僧も多く、このため詩風は大いに興り、質的にも量的にも、はるかに王朝・平安時代をしのいだ。

○円覚寺の開山無学祖元は宗の名僧で北条時宗の招きに応じて来日した帰化僧である。始め建長寺に居り、時宗が円覚寺を創建するや、請うて開山とした。祖元師の胆力はよく時宗を感化して、元兵と戦う決止を起させたと言われている。次の詩は、師が温州（宗末）にて兵難を避け、寺堂に座していると、元兵が突如乱入し刀を突きつけた。師は従容として次の詩を唱えると、元兵はその胆力に圧倒され、礼拝して去った。

○　虜に示す　　釈　祖元

乾坤　地の孤杖を立つる無し
喜び得たり人空にして法もまた空なるを
珍重せよ大元三尺の剣
電光影裏　春風を斬る

○（大意）この広い天地に僧一人を容れる余地もないというのか。だが、人間も仏法もすべて空であると観じている現在のわしはうれしい。大元国の兵達よ、その立派な三尺の剣は大事にしなさいよ。こゝで今、一切空と悟っているわしの首をはねたところで、いわば電光一せん、春風を斬るのと同じじゃよ。

○右の釈祖元の詩はまさに日本的であり、武士道あるいは日本精神の根源をなすものとして、戦前の漢詩集には欠かせない存在であった。日本漢詩は、五山時代に王朝風から大きく脱皮した。僧達は五山を中心として、禅の精神を漢詩に託して表現し、かつ仏法を説いた。そして、室町時代をその最盛期として華を咲かせたのである。

ぎんなん

以前から疑問に思っていたのですが、旧教本のうち中国詩で、題名の下に例えば「唐　李白」と作者名を表示していることです。そのため練習時、先生の声に続いて、小学生のように大きい声で「唐の李白」と唱和しているのを聞くことがあります。漢詩の吟詠にたずさわる者が「唐の李白」というのは、音楽関係者が「ドイツのベートーベン」というのと同じです。永年気になっていましたが、新教本「和漢名詩の吟じ方」で改まりました。作者の上の国名または時代呼称名の表記をやめ、それを作者名下の（　）内に移し、作者の生年と没年を併記する形式となりました。ごらん下さい。

（訂　正）

十月号後藤道風さんの俳句（中国吟行）
〃仏灯の　反り炎昼の雲わきぬ〃は仏塔に訂正。

（入　会）

718 根岸哲郎　葉山町堀内二七二
（堀内・D）（電）〇四六八―七五―二三九八

（退　会）

249 曽村静山（堀内・B）